
魔法少女リリカルなのは ～夜天を射る弓～

イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～夜天を射る弓～

【Nコード】

N7272S

【作者名】

イツキ

【あらすじ】

ミッドチルダを震撼させたJS事件。

それから一年がたった今、更なる事件が人知れず幕を開ける。

注意

この作品はクロスオーバー系小説です。

またこの作品はオリジナルキャラではございますが、設定上原作キャラの子供が登場します。特定のカップリング以外認めない方等は

不快に思ってしまう可能性がある事をここに記させていただきます。

最初に

この作品は魔法少女リリカルなのはシリーズと月姫のクロスオーバー小説ではありますが、とある事情により、月姫側は既に本編が終了、長い年月が過ぎている為、メインはオリジナルキャラを据え、登場する原作キャラは年月が過ぎてても外見が変わらない、または変わらなそうなる人物を選別して登場させるつもりであります。

もしそういった事が苦手、お気に召さない方が読んだ場合、不快な思いをさせてしまう可能性があるのをあらかじめここで述べさせていただきます。

また、作者がこの話を書くにあたって、独自設定がいくつが存在しております。

その点を御承知の上で読んで頂けると幸いです。

はじまりの夜（前書き）

遂に始めてしまいました。

自分のメイン作品であるコルトの話が終わるまでは更新が遅くなる
時がありますが、宜しければ読んで頂ければ幸いです。

はじまりの夜

俺が代行者　人ならざる異端者を狩る者としての仕事をしたのは今から10年前、普通なら丁度小学校を卒業する年齢の事だった。

場所は母さんの仕事について行って訪れた街　海鳴市。母さんが言うにはつい最近高い魔力を何回か感じる事が出来たらしく、死徒や魔術教会と関係があるかどうかの確認だと言っていた。

元々長期滞在は考えてなかった事から、母さんはホテルを借りて活動を行った。その間俺は昼間は一緒に行動して、危険度が上がる夜は基本ホテルで待機して母さんの帰りを待っていた。だがそんな生活を送っていたある晩、俺は部屋を抜け出して深夜の街の散歩に出かけた。

何故そうしようと思ったのかは真面目な話分からなかった。とりあえず、後で母さんに叱られた時には“今夜は本当に月が綺麗だったから”と答えてキツイお仕置きを受けたのは今となっては良い思い出だ。

まあそんな訳で夜の海鳴市を出歩いていた俺は、その途中でふと感じる事が出来た嫌な感覚に、間違っていて欲しいと思いつつながら、人の気配が殆どしない通りへと急ぎ向かった。通りに到着すると、そこにはスーツ姿の男性と、その男性に壁際に追いつめられた女の子がいた。その側には子供用の車椅子が倒れており、女の子は体…おそらく足が悪いのであろう事が分かった。

「嫌っ！ こっちこんといて！」

「……………」

また今にも無言で女の子に襲いかかろうとしている男からは生気は感じられない……要は死者^{操り人形}。それを認識したと同時に俺は、両足に意識を集中させた後に地面を力強く踏み込んで跳躍を行う。そしていつもの癖で持ち歩いていた訓練用の折り畳み式ナイフを右手の人差し指と中指で挟むようにして構え、狙いを定めた後に男に向けてそれを投擲した。

俺が投げたナイフは寸分のズレも無く男の脇腹に命中し、その反動で男はまるで思いきり突き飛ばされたかのように倒れ込む。当たったとはいえ、ただの訓練用ナイフが相手を吹き飛ばしたのは鉄甲作用。母さんから教わった威力を上げる投擲方法のおかげで、男が怯んでいる隙に俺は女の子の目の前に着地し、無言のまま車椅子を起こす。

そして

「危ないから暴れるなよ」

「きゃっ」

一言話しかけた後に女の子を抱き起こして座らせる。女の子は小さい悲鳴こそ発したが、暴れる事が無かったのですぐに座らせてやれた。

そして少しでも安心できればと、一瞬笑みを浮かべた後に新たに
取り出したナイフを逆手に持ち、立ち上がるうとする男との距離を
一気に詰めた。

「終わりだ…… 汝に魂の救済があらん事を」

トドメの一撃として、男の顔がこちらを向いたと同時にその眉間
へとナイフを突き立てる。男は声にならない呻きを発した後に塵と
化し、その場には男の着ていた衣類だけが残った。

「あ、あの……」

消滅の際に残った塵を払っていると、助けた女の子が少し離れた
場所から話しかけてくる。話しかけてくる女の子と俺との距離があ
る程度あったのは、多分見ず知らずの人物である俺への警戒心から
だろう。

まあ、いきなり変なのに襲われたり、見ず知らずの男の子がナイ
フでそれを消滅させてたら、警戒しない方がおかしいが……。

「えと、助けたださってありがとうございます…… それであの、
今の男の人は一体……」

「え、えつとだな……」

自分達のしている事について、一般の人にはそう簡単に教えてはならないと母さんに言われている。だからこの場も説明することなく何とかきりぬけることができないかと手に持つナイフをしまい、逆の手で頬を搔きながら必死に考えた。

「悪いが説明はできない……俺もアイツも、どうせ一夜限りの幻だ。普通の毎日を過ごすのに、俺達の記憶はいらない……」

今考えると、なんでこの時にこんな恥ずかしい言葉が口から出たか分からない。もつとマシな言い回しも出来ただろうし、実際女の子も不思議そうな表情をしていた。

まあそんな感じにはぐらかした後に、怖がられないように気をつけながら、俺はその女の子の目をじっと見つめる。俺が導き出した結論……それはこの子に習ったばかりの暗示をかけて、この場を乗り越える事だった。

俺がかけた暗示は二つ。一つは今起きた事を不思議に思わない事。そしてもう一つは一度寝てしまえば俺や死者について忘れてしまうという暗示だ。

「それじゃあ家まで送っていいんか。道案内、よろしくな」

「ありがとう、助かるわ……」

しっかりと暗示が効いているようで、俺の提案に女の子は素直に返事を返す。その様子には先程のような警戒心は感じられず、まる

でいつもやってもらっている相手に任せるような感じに思えた。

そして俺は暗示をかけたという罪悪感を感じながら女の子の車椅子を押して家へと向かった。勿論その間無言でいるという訳にもいかず、ふと思う事もあったので、女の子に話しかけてみたりもした。

「なあ、なんでお前不自由な身でこんな夜遅くに出歩いているんだよ」

「ん〜……実は特に理由なんてないんよね……強いて言うなら、月が綺麗やったから？」

「さよか……」

会話内容を思い出してみると、この子も外出の理由を月にしていたっけな。その他にも世間話のような事をしながら家まで到着する。

「それじゃあな。これからは気をつけろよ」

「送ってくれてありがとな。それじゃあまたな」

また（・・・）……おそろくないであろう事について視線を逸らす。視線を逸らした先にあった、家の表札に書いてあったのは【八神】という文字。

この時の俺は再びその名前を見る事になるなんてその時は全くと

いって思ってたなかった。そして更にその時死者に投擲した訓練用のナイフを一本なくしていた事にも気が付くことが出来なかった。

【新暦77年】

ミッドチルダ
はやて自宅

「ふう……今日も色々大変やったなあ……」

仕事を終えて自室へと帰ってくると同時に、つい大きく息をはいて椅子へと座り込む。

機動六課を解散してから約一年、フリーの特別捜査官としての毎日を過ごしているが、最近は特に忙しい。

「もう30年近くも前に紛失したロストロギアの発見と回収……本当、なかなか無茶な話やね……」

自宅へと持ち帰ってきた資料を取り出して目を通し始める。

今受け持っている事柄はとあるロストロギアの回収任務。そのロストロギアが最初に存在を管理局に認知されたのは、なんと今から25年前の地球。そして地球で何度か出現しては反応を消滅させるを繰り返した後に消息を絶つたらしい。

その時の管理局は今以上に人員不足が深刻で、消息を絶つたものより実際に起きている物事を優先させていた為に今まで回収されることなく今ではどこにあるか分からない状態にあるらしい。最後に存在を確認されたのが地球であるという理由から私に回ってきたのだが……正直お手上げに近い形になってきている。

「まあ地道に少しずつやっていけば、突破口が見つかるかもしれんか……」

今までに纏めた情報を整理しようとチップを入れている引き出しを開ける。そこには今まで私が関わってきた事件についての情報や今回の事が必要になった古いデータを入れたチップ達と、ただ一つ違うある物が入っている。

引き出しの中にある物は、一本の折り畳み式ナイフ。どこで誰にもらったかは覚えていないんやけど、ヴォルケンのみんなと出会う前に一度夜の散歩……正確には歩かへんで車椅子での移動やから散策かな？

まあとにかくその時に会った人の持ち物で、その人に内緒で手に入れたのは覚えている。そしてその夜、私はこのナイフを手を持ち

ながら寝ていたんやけど……本当に持っていた人はどんな人で、どんな経緯だったかは覚えていない。

ただ、今までなんとなく捨てることもできず、こうして大切にしまっている……いつか持ち主に返すことが出来る事を信じて。

はじまりの夜（後書き）

どうでしたでしょうか？

これからも頑張っていけますので宜しくお願いします。

第一夜（前書き）

連日投稿です。

第一夜

「……………」

ミッドチルダの僻地にある小さな村。夜遅くにそこを訪れたカソックを来て、眼鏡をかけている黒髪の青年は、村の入口から見る事が出来たあるものに表情を歪める。

青年が視線に収めたもの……それは村の中心部にいくつも横たわっている人の姿。その人達は遠目で見ても既に生きていないという事が分かった。

しかも一部は既に腐乱が始まってしまっているのか、時折腐乱臭が風にのって青年の鼻孔を刺激する。

「情報が遅かったか……くっ……」

最悪の状況を前にして、青年は両手の拳を力強く握りしめる。

青年は自らが所属する組織からの連絡を受けてこの村を訪れていた。

青年が担当する事は可能な限り迅速に行く必要があった。しかし元々僻地での出来事だった為に組織の方も情報を手に入れる事が遅れてしまっていた。

もつとも、相手もそれを見越してでの出来事であろうと青年も理解している為、組織の諜報力を悪く言うという事はしない。

「せめて神の祝福があらんことを……」

生を失った人達が集められている場所まで近寄った青年は、ゆっくりとした動作で十字を切り、その後祈りを捧げる。そして祈りを終えて大きく深呼吸をした後に慎重な足取りで村の中を歩き始める。

村には人の気配は感じる事ができず、所々に赤い液体による染みができしており、青年は暫くの間村の様子を見て回っていたが、ふと裏道の一角で足を止める。足を止めた青年の目の前には、まだあまり年齢もいってないであろう少女の亡骸があった。

少女の目は自分を襲ったものへの恐怖からか見開かれており、首筋には噛まれたような痕が見受けられる。青年は再度十字架を切つて祈りを捧げると、その少女の目を閉じた。

そして

『Set up』

「っっ！」

その直後に感じた後方からの殺気に、いつの間にか持っていたナ

イフを振り向きながら投げた。

「!?!?!?!」

青年の手から放たれたナイフは、後ろに迫ってきていた初老の男性へと突き刺さってその行動を止める。いつの間にか裏道には今の男性以外にも年齢も性別もまちまちの集団が現れていた。その集団は皆生氣を感じることが出来ず、ただ無言で青年へと視線を向けている。

「死者……念のために引き継ぎの部隊を呼ばなくて正解だったな。
お前らの相手は……一人の方がやり易い!」

『六本の Six Knives ナイフ』

青年のかける眼鏡型のデバイス「セブンムーン」から声が発せられると同時に、青年の両手にはそれぞれ三本のナイフが表れていた。青年はそのナイフをそれぞれの指の間に挟むようにして保持すると右手を集団へと突きつける。

「お前達には罪は無いが……許してくれよ」

「ッ」

集団から突出してきた女性が襲いかかろうとすると同時に、青年はその場で左足を軸とした回転を行い、その勢いを利用して左手に持っていたナイフを投げつける。三本のナイフはそれぞれ襲いかかってきた者の頭部、胸部、下腹部を捉えて体を浮かせ、向かいの壁へと叩きつける。

投げられたナイフが刺さった後に当たった対象を押し飛ばす。本来なら驚く事なのだが集団はそれを気に留めた様子も無く、青年へと襲いかかろうとする。

『Materials Transmission』

再度セブムーンから音声が発せられる中、青年は無言のまま姿勢を低くして集団へと飛び込み、正面に立っていた中年の男性に左肘による当身を行う。それによって隙のできた腹部に右手の三本のナイフを突き立てると、続けていつの間にか再度左手に握られていたナイフを一閃し、後ろから襲いかかろうとした数人を切りつける。

更にそれによって一瞬の怯みが出来たのを感じ取った青年は、再度姿勢を低くした後、勢いよく飛び上がって死者達を下に見下ろす。

「主よ、この不浄を清めたまえ！」

三度いつの間にか両手に収まっている六本のナイフを残った六体の死者に向けて、両手を振りかぶった後に投げつけた。

「……………?!?!?!」

殆ど同じタイミングで胴体にナイフが直撃した死者達は、その衝撃で地面へと押し倒される。そして次の瞬間、ナイフが刺さった場所から炎が吹き出すと死者の体を包み込んだ。

炎の勢いは強く、最初こそ苦しい様子をみせた死者も次第に動かなくなつてその身を焼かれていく。その様子を先程までの鋭い視線ではなく、どこか悲しそうな表情で見っていた青年は、それぞれの炎が完全に消えたのを確認した後に音声通信のモニターを表示した。

「アルクより後続へ。村の壊滅と死者の存在を確認。状況は最悪…
…万が一の為に戦闘、および埋葬準備の後での行動を進言する」

「了解した。後はこちらが引き継ごう、そちらは帰還してくれ」

「……………お気遣い感謝する」

アルクと名乗った青年は、通信を切った後に何も持っていない両手を軽く振った。その瞬間、またもその手には六本のナイフが握られており、先程までナイフが落ちていた場所にはいずれも、何かしらの本の一ページが落ちていて淡い光を発していた。

「……以上が今回の報告だ。また結果的に、後手に回ってしまったな……」

「……もうこれで四ヶ所目、これ以上被害を出す訳にはいかないですわね」

「だな……」

前もって用意した報告書に目を通しながら俺の補足説明を受けていた上司 カリム・グラシアの言葉に頷く。

先日訪れた村を含めて、これまでに住人が全員殺されるか死者となり、地図からその名前を消すことになった村は三つ目になる。

ミッドチルダで最初に死者が確認されたのは土地が安いことを理由に僻地に設けられた社宅付の大型工場。それを皮切りに大体一週間前後のペースで襲撃が行われている。しかもその位置は少しずつではあるが、ミッドチルダ都市部へと向かっていた。

「……ただ自分が本当に情けないですね。この件に関してはJS事件解決後から予言を見る事が出来たのにも関わらず、何の予防策をとる事も出来なかった……その結果、これだけの人の命が……」

悲しみの表情を見せるカリムがポケットから紐で結った紙の束を取り出す。そして紐を解き、束の中から一枚の紙を手にとると、それまでは何も書かれていなかった紙に文字が記される。

「『月夜の祟りを模す箱が解き放たれし時、記憶の中に生きし死をもたらす者、偽りの体を持ちて生ける屍が地上を徘徊する。そして流転の者が真の血肉を得し時、夜の天より湧きし闇現れ世界を覆わん』……これにある「生ける屍」というのが、まさか地球に存在するものに関係しているなんて思いもせませんでした」

「俺も最初見た時には目を疑ったさ。まさかミッドで死者を相手にするとは思ってもみなかったからな……」

本来俺はとある縁で聖王教会に名前を置いただけで、基本自分の世界で死者等を狩る代行者としての活動を行っていた。そんなある日、「貴方の専門に関するであろう仕事を頼みたい」という連絡を受けてミッドへと訪れた俺が見たものが死者だったのだ。

「とにかく、毎度死者に関しては殲滅こそしているが、死者を生み出す元……吸血鬼の姿を捉えていない。こっちをなんとかしないと、死者なんていくらでも増えちまうからな」

「血を吸った者を支配下とする者……実はそれに関係しているかもしれない情報が」

カリムが机の引き出しから取り出した書類を受け取る。それに軽

く目を通してみると、内容はある魔法具ロストログアに関するものだった。

もっとも、詳細は分かっているのかあまり記されてはおらず、この物の反応らしきものが感知できたポイントに関する記述が多い。

「詳細不明のロストログアが一体何だつて……なるほどな、言いたい事は理解した」

「やはり気がつきましたか？ それ、確実に無関係では無いと思いませんか？」

俺の反応にカリムが僅かに笑みを見せる。その資料によって分かった事……それはこの魔法具が今まで死者が現れた場所での反応を見せた事、そして一番最初に反応を見せたのが地球のある都市……そこは俺にとっても全く無関係とはいえない都市だった。

「死者が現れた場所全てで反応を残す……ここまで偶然が重なる事は無いと思いますが……どう考えます？」

「まあカリムの言うとおり、何かしら関係はあるだろうな。それじやあ俺はこれを探せばいいのか？」

「そうですね……もっとも、正確には探すのでは無くて探しているある人物を助けてあげてほしいのです」

「助ける？」

「実はそのロストロギア、今私の親友が探しているんです。ですのであなたにはその手助けをしていただく形になりますね」

「なるほどな……それならその搜索している人物についての資料とかないか？ 協力相手に関しては知っておいた方がいいからな」

「はい……少しまってくださいね」

カリムが空間モニターを表示して作業を行う。ミッドに来てそれなりに期間があるが、どうもこの空間モニターというものに慣れない。その為、じつは通信用のものしかおれは操作ができない。

「これが貴方に手助けしてほしい人物のデータです。こっちに来てから名前とかは聞いているかもしれませんがね」

俺の目の前に複数の空間モニターが展開される。そしてその内の一枚に移っていた写真を見た時、驚きから不覚にも目を見開いてしまったを感じた。

「どうかしましたか、アルク？」

「いや……それで俺は彼女 八神はやてを手助けすれば良いんだな？」

「はい……こちらでも何かしら情報がつかめ次第連絡いたしますので宜しくお願いします」

「了解だ」

俺が了承の言葉を述べると、カリムは嬉しそうに笑みを浮かべる。その一方で俺は、もう一度写真へと視線を向ける。この写真を見た瞬間に感じた、なんとも言えない感情を理解する為に。

第二夜（前書き）

〔未確定ロストログアについて〕

以下の情報は、管理局が確保できていないロストログアについての情報を纏めたものである。

今回調査対象となったロストログアは、25年前に存在を管理局に確認されながらも一度も目視による確認をされておらず、外見やその詳細は不明となっている。

分かっている事は一定の条件を満たす事でそれが発動し、広範囲に何かしらの干渉を行う事。

そして今までに複数の世界で発動した事と、今現在公表されていない無差別襲撃事件と関係があるという事だけである。

なお後記の土地名は、ロストログアが発動したとされる箇所である。

第97管理外世界

地球 三咲町

同上

地球 海鳴市

ミッドチルダ
各所

作成者
シャツハ・ヌエラ

第二夜

「そろそろ次の獲物を得るべきか……少々おながが空いてきたみたいだ」

ミッドチルダ都市部から離れた場所にある森の中。そこに立つ古びれた洋館で、豪華な装飾が施されている椅子に座る白髪を伸ばした男が足を組みながら座っていた。

椅子の隣には同じように装飾された小さめの机が置いてあり、その上にはシャンパンが入ったグラスが置かれている。

「獲物を得る、か……^{死者}従者を増やすの間違いじゃないか？」

白髪の男がシャンパングラスに手をのばそうとしたところで、部屋のドアが開き、今度は黒髪を長く伸ばした青年が部屋へと入ってくる。白髪の男がすっかりとした服を着ているのに対して、黒髪の青年は白いシャツを着崩しており、肌が露出していた。

「いや、今回は獲物を得るとい言葉で合っているのさ。今回は、彼に行ってもらったつもりだからね……」

青年の問いに答えた男は、懐から小さな宝石箱を取り出してその蓋を開ける。すると箱の中から黒い物体が飛び出したかと思うと、

その物体は窓の方へと向かい、そのまま洋館の外へと出て行った。

「今のは……」

「君と同じ、偽りの命と体を得た死徒さ。まあちょっと元からは変わっちゃっているけど、この箱から得た記憶によると666の獣の命をその身に宿しているみたいだね」

「666の獣……成程、彼が行くのであれば従者は増えない……彼は吸うのではなく喰らうからな……」

「その通り……それにどうやら最近、私達に対する警戒が強くなっ
たらしいし……まあ管理局にそろそろ喧嘩を売るのも楽しそうだな」

自らの発言が現実になった時の事を想像したのか、男は冷たい笑
みを浮かべた。

「教会本部にくるのは久しぶりですね、はやてちゃん」

「せやな……最近は搜索任務で手一杯で、カリムにも会いにこれへんかったもんなあ……」

リインの言葉に、自分の最近の行動について思い出しながらカリムの部屋へと廊下を歩いていく。

私は今日、カリムから呼び出しを受けて教会本部へと足を運んでいた。どうやら今私が受け持っているロストログア搜索任務に関する話があるらしく、半ば手詰まりとなっている今の状況から打開できる話が聞けるかもしれないと、僅かばかりの期待もある。

(せやけど……なんとなくいい話だけじゃない気がする……気のせいだとなえんやけど……)

「ふえ？はやてちゃん、どうしたんです？」

「いや、何でもない、大丈夫や」

リインと話している間にカリムの部屋の前へと辿り着く。仲がよいとはいえ、仕事の最中は上官と部下の立場。失礼のないように軽く服装を整えた後にドアをノックする。

「はい？」

「八神はやて二等陸佐他二名です。入ってよろしいでしょうか？」

「どうぞ。お待ちしておりました」

「失礼します」

了承を得た後にドアを開けて部屋へと入る。中に入ると、カリムが私達に向けて笑みを見せていた。

「いらっしゃい、はやて。今日は急に呼んでしまつてごめんなさいね」

「そんな気にせんでええよ。今のところ、担当してる仕事も手詰まりしてるし、むしろその情報を聞く為ならこっちが訪ねるのは当たり前的事や……なあ、リイン」

「はいです」

「そう言ってくれると助かるわ……とりあえず立ち話も難だし、こっちへ」

カリムの勧めに円卓の椅子へと座る。そしてリインは私の右肩に着地すると、そこに座り込む。そしてカリムが対面へと座るのを確認した後には話を始める。

「それで、いきなりで悪いんやけど……」「失礼します。紅茶をお持ちしました」

私の言葉を遮る形で、紅茶の入ったポットと人数分のコップをトレーに載せて持ってきた男の人が部屋へと入ってきた。初めてみる顔やけど……大体私と同じくらいの年齢やるか？

「ありがとう、アルク」

「いえ、そんな特別な事をしている訳じゃないので」

アルクと呼ばれた男の人は、カリムに一礼した後に机に紅茶の入ったカップを置いていく。私の目の前に置かれたティーカップからは、どこか気分を落ち着かせる良い紅茶の香りを感じることが出来た。

「どうぞ。お砂糖は必要ですか？」

「あつ、大丈夫です……ありがとうございます」

「あとリインフォース？曹長、ですよね？　このような形でお茶をご用意させていただきました」

アルクがそう言って机に置いたもの、それは丁度リインの身体の大きさに合った机と椅子で、机の上には同じくサイズの合ったポツ

トとティーカップが置いてあった。

「うわぁ……ありがとうございますっ！」

それを見たリインは私の肩から降りてその椅子へと座る。その表情からはとても嬉しいという事が見て取れた。

(リインの分も用意してくれたんや……っと、あれ?)

ここに来て、普段ならこういう役目を担当しているあの人がいない事に気がつく。一度気がついた事に関しては、どうしても知りたいたいという欲求が働いてしまうもの。

だから私は知っているであろうカリムの方を向くと口を開いた。

「そういえば騎士カリム、シスター・シャツハは今どこに？」

「シャツハには今、とある要件の為に動いてもらっています。だから今はアルクについてもらっています……そういえば、アルクについて説明しておかないといけないわね」

「アルクと申します。今回は任務中のシスター・シャツハに変わって、騎士はやてとの連絡係を勤めさせていただく事になりました。どうか宜しくお願いします」

「こちらこそ、宜しくおねがいます」

「よろしくです」

姿勢を正した後に自己紹介をしたアルクに、こちらもリンと一緒に椅子から立ち上がって頭を下げる。頭を上げてアルクの顔を見ると、とても良い笑顔で笑っていた。

「はやてには悪い事してしまいましたね……」

「すまないカリム……だが出来る限り、俺の立場……代行者としての立場を知られたくないんだ」

八神はやて二等陸佐とリインフォース？曹長が帰った後、少し申し訳なさそうな表情を見せるカリムに頭を下げる。今回の対面で本当ならカリムは普通に代行者として俺を紹介するつもりだった。

しかし俺の提言によって紹介は少々事実をねじ曲げての方法をと

る事になったのだ。

俺が連絡係を務めるのは本当の事だが、俺が代行者である事や地球の生まれである事については秘密にして貰ったのだ。これで今回の立ち振る舞い方と合わせて、俺は非戦闘員として捉えられただろう。

だがカリムにとって、八神二等陸佐は親友といえる存在。そんな相手に、必要な事とはいえ嘘をつかせた事に少なからず罪悪感を覚えてしまっている。

「謝る必要はありませんよ。はやてなら分かってくれる筈ですから

……」

「なら良いが……それで、カリムはどう考える？ 八神二等陸佐は、出現予測ポイントに赴くと思うか？」

今回の話し合いで、八神二等陸佐には今までで分かっているロス・トロギアに関する情報、そして死者に関する情報を提供した。その中には今までの傾向から割り出した出現予測ポイントについて書かれているものもあった。

「おそらくは……はやては大切な人がいなくなる辛さを知っているから、むしろその原因を無くすというのも考えて行くかもしれないねんね……そういう意味では、はやての性格を利用してしまったかも

……」

再びカリムが罪悪感によってか頭を俯かせる。なんかこのままで
は会話する毎にカリムを落ち込ませてしまつのではないかと思つた
俺は、無言でカリムの部屋から退出する。さっき見た、予測ポイン
トの位置を思い出しながら。

「せやけどごめんな、ヴィータ……こんな時間に急に呼び出したり
して……」

「謝る必要なんてねえよ。アタシははヴォルケンリッターやての守護騎士、主に呼ばれ
たらすぐに駆けつける」

「そっか……ありがとな」

隣に座るヴィータの顔を一目した後に正面を向きなおして車のナ
ビゲーション・システムを確認する。

カリム達と別れた後、私はすぐにヴォルケンのみんなのスケジユ
ールを確認した。そして、今日は偶然空いていたヴィータと連絡を
とって合流し、ある場所へと向かっている。

「……つまり今向かっている場所に、はやてが任務で探しているロストロギアがあるかもしれねえって事なんだな？」

「そのとおりです……ロストロギアの回収だけならリンとははやてちゃんとできるですけど……」

「死者……まさかミッドでこんな出来事が起きとるやなんて全然知らへんかった……」

ロストロギアの反応があったところで出没しているという、そこにいた人達のなれの果て……ロストロギアを回収する事でこの出来事が終息する可能性があるなら、なんとかして回収しなければいけない。

「とりあえずポイントに着いたら通常通り……っ!？」

私の言葉を遮るように、緊急回線の使用を告げるアラーム音が鳴った後に、通信用の空間モニターが表示され、途切れ途切れの通信が入り始める。モニターに表示されている発信ポイントは、今丁度私達が向かっていた予測ポイントの一つだった。

「こ、こちら第……陸士部隊！ だ……か応答し……れ！」

「特別捜査官、八神はやて二等陸佐です。通信を受信しました、何かあったんですか？」

「今す……うえんを呼んでく……黒い動物達に……うわああああっ
!?!」

局員らしき人の断末魔の叫びを最後に通信が途絶する。これが意味する事は、考えたくないけど一つしかない。そして、自分が何をすべきかは考える必要もない。

ヴィータ達の方に視線を向けると、二人共表情を引き締めて私の指示を待っていた。

「リインは今の通信を最寄りの部隊に報告！ ヴィータは都市部の飛行許可の申請を！」

「はいです！」

「分かった！」

指示をした後に車を止めるべく駐車場を探す。駐車場を見つけ、車を止める頃には二人は報告と申請を終わらせていた。

「リイン、ヴィータ、とにかく今回は全速力や！ 目標、緊急通信発信地点！」

「了解！」

そして車から出た後にバリアジャケットを見に纏い、目標地点へと急いだ。

第二夜（後書き）

はやてがちゃんとはやてらしく書けているか心配です……。

第三夜

本当に突然の事だった。

彼が村へとやって来た時、そこでは出現予測ポイントにされた事を受けて一時的に避難するように説明を受けた村人が広場に集まっていた。

彼にとってそれはとても都合な事で、集まった人々を視界に捉えると自らの使い魔を解き放つ。

彼の使い魔　黒い獣達は解き放たれた瞬間から、自らの欲求を満たす為の行動を始める。

獣達の欲求は食欲……それを満たす為に目の前に存在する者達を喰らい始めた。

黒い獣が村人を襲う。

その異変は避難を誘導するために村にいた陸士部隊にすぐ感知されてその阻止へと動き、攻撃を始める。

その攻撃はある程度獣達を倒す事には成功したが、次々に現れている獣を全て倒す事は出来ず、遂には部隊員にも被害が出始める。

そして偶然緊急通信を受信したはやてとヴィータが村へと到着した時、生きた人間はもう片手で数える事が出来る程しかいなかった。

「はあ……はあ……何とか撒いたようですね。大丈夫ですか、皆さん……」

窓から外を見回し、黒い獣達の姿が無いことを確認した、腰の辺りまで届く長い黒髪を赤いリボンで結んだ女性　メイヤ・クロウフイルドは、建物の中で腰を下ろして休んでいる、獣達の襲撃を生き残った人達へと視線を向ける。

襲撃を生き延びたのはメイヤを入れて四人。

しかし管理局員はメイヤだけで、あとは皆村に住んでいた人々だ。

しかもその内一人はここに来るまでメイヤが抱きかかえていた年齢のまだ幼い女の子……状況は最悪といったところだった。

「私はどうなってもいい……せめて村人の皆さんを安全な場所に行けるようにしないと……」

今の状況を打破する為の方法を考えながら、メイヤは左手に持つ和弓型デバイス「シャープシューター」を見つめる。

メイヤが得意とするのは、遠距離からの正確な射撃。

それ故に今回のような多数を相手にするのは苦手な為にメイヤは獣たちの迎撃の際に後方に送られていた。

それ故に一人陸士部隊で生き残る事が出来たのだが、正直メイヤに

はそれを言ふ事は出来なかった。

「もっと自分に力があれば……もっと多くの人を、部隊のみんなを助ける事ができたかもしれないのに……」

《こちら特別捜査官、八神はやて。誰か生存者はいらっしやいませんか？ いらっしやいましたら返事をしてください》

《誰かいねえのか！ 返事してくれ！》

「この念話は……」

聞き覚えのある名前の持ち主から来た念話に、メイヤはハツとして顔を上げる。

助けが来た事に心のどこかに助かるかもしれないという希望が湧いてきたのか、その表情は先ほどより明るくなっていた。

《こちら陸士部隊所属、メイヤ・クロウフィールドです。そちらは元機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐でしょうか》

《そのとおりです。貴女のいる場所を特定しました。すぐ向かうので待っていてください》

《了解です、お待ちしております》

念話を終えたと共にメイヤは大きく息をはいて安堵の表情を見せる。そして助けがきた事を周りの人達に説明しようとした彼女が見たのは、自分から一番遠い場所に座っていた人に襲いかかるうとする黒い犬達の姿だった。

「リイン、次はどっちや！」

「そこの角を右に。あとは真っ直ぐ行くだけです！」

リインの言葉に従って道を右へと曲がる。

周りへと視線を向ければ、そこら中に赤黒い液体が飛び散り、またその液体を踏んだのか、大小様々な動物の足跡が残されている。

赤黒い液体が何なのか、正直な話考えたくないが、おそらくは自分の想像が正しいのだろう。

「畜生！ 一体何があったってんだよ、この村で！」

隣を飛ぶヴィータが誰に問い詰める訳でもなく、大声で疑問の言葉を口にする。

そして、今は何でもいいから大きな声を出したい……そんな感情が何となく伝わってきた。

(もしヴィータやリインと一緒に居らへんかったら、私も同じ事をしていたかも知れへんな……)

「見えました……な、なんですかアレ!？」

驚いた様子のリインの言葉に視線を正面へと戻す。

少しして、暗い夜道を幼い女の子を抱えて走る女性の姿が見えてきた。

そしてその女性を追いかける存在が何か分かった瞬間、驚きから息をのんでしまった。

「なっ……なんなんや、あれ……」

追いかけて来ているのは犬や鳥に鹿……とにかく全身が黒く、朱に染まった目を光らせた何匹もの獣の集団やった。

確かに緊急通信でも黒い動物とは言ってはいた。

せやけど実際に見たことによる衝撃は十分なもので、そのせいか身体が重く感じて反応が遅れる。

そんな間にも動物達は女性との距離を詰めていて、それに気がついて後ろを振り向いた女性が足を躓かせて転んでしまう。

それを動物達が見逃す訳もなく、先頭を走る大型犬が今にも飛びかかるうとしていた。

「っ、いかん！ 早く助けへんと……」

「駄目です！ 間に合いません！」

「お前達、道を開ける！」

「「「っ！？」」」

突然後ろから聞こえてきた怒鳴り声に、私達は反射的に道の真ん中を空けた。

すると次の瞬間、誰かがそこを駆け抜けたと思うと同時に、今まさに女性に噛みつこうとしていた犬の頭部が仰け反った後に吹き飛んだ。

目の前で仲間がやられた為か、動物達の進行が止まる。

そしてその動物達の前には、以前聖王教会で男性が着ていたものに似た服装の男の人が立っていた。

（使い魔……これだけの数を使役させる事ができるなら、かなり強力な力を持っているな……）

再度進行を始めた場合にすぐ対応できるようナイフを構えながら、現在の状況を整理する。

先ほど投げたナイフで倒せた事から、個々の力はそこまで高いという訳ではないように思える。

しかしそれでも40以上は居るように見えるこの数は十分な脅威となり、またこの街全体を包むように広がる強い血の匂いが、この使い魔達による被害の大きさを伝えてくる。

「あ、貴方は一体……」

「俺の事は気にするな！ その子を持って早く逃げろ！」

「は、はい……」

先ほど足を躓かせてしまった女性が、自分の抱きかかえていた女の子を一目した後にたちあがり、後方にいる八神二等陸佐の元へと走っていく。

これでとりあえずは生存者が二人は救えた事になる……今まで襲われた村は全員がやられてしまっている事を考えれば、それだけでも良いと思わないとやっていけない。

「……………」

大きく口を開けてそれぞれ咆哮を行った後に動物達が一番近くにいる俺に向けて襲いかかってくる。

可能な限り後方へは向かわせないようにしなければならぬ為、多少の無茶は承知で動物の群れへと飛び込んでいく。

「はっ！」

複数同時に跳びかかってくる犬達を、下から上へと切り上げるようにして切り裂き、そして振り上げた手に持つナイフを投擲し、少し離れた位置から突撃しようとする鳥達を貫く。

一人で多数を相手にする場合、複数の敵が自分を攻撃できる範囲に入る前に倒す必要がある。

その為に絶えず自らの位置取りを変え、出来る限り自分の間合いを維持しながら攻撃を続ける。

それによって、少しずつではあるが周りにいる動物達の数は減ってきていた。

(この調子ならいけるか……ん?)

突然、今までは本能のままに俺への攻撃を続けていた獣達が俺から遠ざかるように動き出す。

(主人から撤退を指示されたか？ いや、それならもっと一気に動く筈……)

「上から来とる！ 避けるんや！」

後ろから八神二等陸佐の声が聞こえてきた瞬間、何故今まで気がつく事ができなかったのか疑問に思うほどの殺気を上の方から感じる。視線を上に向けてみると、動物達と同じような黒いロングコートを羽織った大柄の男がこちらへと向かってきていた。

「喰らう」

そしてコートの中が一瞬膨らんだかと思っただ瞬間、そこから大きな口のようなものが現れて俺を飲み込まんとしてきた。

「ちっ！」

そんな大きな口の一撃を、咄嗟に地面を転がる事で辛うじて回避する。

それは正に紙一重といったタイミングで、後方からの声が無かったら今頃はあの口に捕食されていたかもしれない。

「ほう……教えられたとはいえ、あのタイミングで避ける事ができるか。流石我が分身をある程度いなす実力を持つ者といったところか」

俺に攻撃を仕掛けてきた男は地面へと着地すると、ゆっくりと立ち上がってこちらを見てくる。

その身体からはむせかえりそうな程の強い血の匂いが漂ってきており、本当に先ほどまで気がつかなかったのが不思議に思えてくる。

「お前がこいつらの使役者か……なかなか残酷な事してくれるな」

「残酷……か。我らはただ食欲を満たしただけだ」

男の周りに獣達が集まり、揃ってこちらを見つめてくる。

その光景を目にした瞬間、何故か俺はコイツの事を知っている気がした。

「貴様……今まで相手にしていた者達とは違う……埋葬者か？」

「……名答……その呼び方を知ってるって事は、こっちの生まれじゃないよなお前」

「無論だ……この混沌ネロ・カオス、このような場所では生を受けたりはしない」

ネロ・カオス……この名前を聞いた瞬間、先程感じた既視感の正体に気がつく。

今日の前にいる男は、死徒吸血鬼の中でも最も古い時代に生まれたとされる「死徒二十七祖」の一人。

代行者になる際に基礎知識として存在を知るような存在だった。

しかしそうになると、ある一つの疑問が湧いてくる。

「ネロ・カオス……なぜお前がここにいる？ お前は既に存在を殺された筈じゃ……」

「知らんな……だがそんな事はどうでも良い。今ここに存在しているのだからな」

ネロ・カオスが右手を上げると同時に、今まで睨みつけてくるだけだった獣達に再び動きが見え始める。

先程までは集まっていた奴らが、少しずつだが横へと広がっていく。

そして合図があればすぐにでも襲いかかれるようにそれぞれが戦闘態勢を取り始めた。

(こいつが本当にネロ・カオスなら、今の状況で戦うにはあまりにも条件が悪すぎる……ここは一旦ひくべきか)

今のところ、こちら側には戦力となる存在ではなく一般人もいる。

まだ母さん程の実力を持っていない俺がネロ・カオス程の存在と戦うのであれば、それ相応の準備や他者によるフォローが必要になってくる。

「お前ら！ 今すぐ目と耳を塞げ！ さもなきや痛い目みるぞ！」

後ろにいる面々に大声で忠告を行った後に、カソックの中からある物を取り出す。

そしてそのスイッチを入れた後、ネロ・カオスに向けて投げつけた。

埋葬者が投げた何かが我々の近くで爆発する。

その瞬間、視界の全てが強い光によって遮られ、また強い音が周囲へと響き渡る。

「むう……」

暫しの間、聴力と視力を奪われる。

本来なら共に人のそれより強化されている五感を封じられる事はない。

しかしながらこうなったという事は、先ほどの物にはなにかしら工夫されたものなのだろう。

(この状態から攻めてくるか……それとも……)

今の埋葬者の行動から考える事ができるのは二つの行動。

一つはこれによって生まれる隙を使って私へと攻撃を仕掛ける。

もつともこれは私にとって殆ど意味をなさない事である為に愚策であると言える。

そしてもう一つは……

「……いったか」

視界と聴力を取り戻した時、そこには埋葬者や、後方にいた糧となる者達の姿もなかった。

埋葬者が取るであろうと考えたもう一つの策、それはこの隙を生かして撤退を行う事だ。

この行動を行えば、あちらにとって態勢を立て直す機会が生まれる。

「無駄な戦いを行うより、後の事を考えるか……よかろう」

周囲を搜索する最低限の数を残し、身体の密度を元に戻す。

もうこの周辺には先程の者達以外に喰らう事ができる存在がない。

餓えぬようにする為、確実に喰らう必要がある。

“お前は既に存在を殺された筈では……”

この場から移動しようとした時、ふと埋葬者の言葉を思い出す。

本当に存在を殺されたのなら、今私がここにいる事ができない。

その為先程は気にせず聞き流したが、なぜそのように話したのか
がふと気になった。

「もし埋葬者が言っていた言葉が本当なら……私は模造品とでもい
うものか……」

その実、おかしいと感じる要素はいくつか存在する。

なぜ自分がこのような世界にいるのか、またそれなりの人数を喰らったにも関わらず、未だに餓えを感じるのか……この疑問は私が模造品であると考えたとそれなりの理解ができる。

「……フッフ、フハハハハハハハハ！」

自らの笑い声が、静かな夜空に響いていく。

一通り笑った後、村の中心部と思われる方へと足を進める。

記憶が正しければ、最初の方に喰らった者達は全て食べつくした訳ではない。

その残りを取り込む為に、私は広場へと向かった。

第三夜（後書き）

ネロ・カオス、もう少し引っ張らせていただきます。

次回も読んで頂ければ幸いです。

また感想やご意見を残していただけると、自分の執筆意欲の糧となりますので嬉しく思います。

第四夜（前書き）

長らくお待たせした上になんかなり短い……どうもスイマセン……

第四夜

「ふう……これで多少は時間が稼げるか……」

ネロ・カオスから感じられた気配が近くにない事を確認した後に、地面にナイフ六本全てを突き刺す。

そしてそれらに魔力を流すと、ナイフはそれぞれ刃で地面や壁を削りながら、自分達が逃げ込んだ家に模様を描いていく。

ナイフが描くのは存在を隠す為の魔法陣。

この魔法陣の中に入ればネロ・カオス本体は無理だとしても、獣達の目は欺ける筈だ。

「やる事は一段落ついたみたいですね。ちょっといくつか聞きたい事があるんですが、少しお時間よろしいでしょうか？」

魔法陣を描き終えたナイフを回収したタイミングで、真剣な表情の八神二等陸佐が話しかけてくる。

一応認識妨害用の魔術を使用している為、俺が聖王教会で会ったアルクだとは気づかれてはないと思うが、発言でぼろが出ないように気をつけながら応答する。

「答えられる範囲であれば……あとそんな改まった口調は必要ない。普通に話してくれて問題ない」

「それなら失礼して……まずはお礼を言わせてもらおうわ。私達だけじゃ、この二人は助けられへんかった……ホンマにありがとうな」

「それに関しては私もお礼を言わせてください……私はメイヤ・クロウフィールドと申します。先程はありがとうございました。あなたの助けが無ければ……この子は助けることはできませんでした」

先程助けた二人の内、地球の弓道衣に似たバリアジャケットを着た女性が深々と頭を下げる。その隣には抱きかかえられていた女の子が立っついて、女性のジャケットの先をしっかりと握りしめていた。

「お礼なんて必要無い。俺は自分の……代行者としての仕事をしただけだ」

「代行者……聞いた事無い役職だな。その服装は、聖王教会の所属なのか？」

少し離れた場所にいた、赤いバリアジャケットに身を包んだヴィータ教導官が少なからず警戒心を表面に見せながら問いかけてくる。

確かに俺はこの場で助けたメイヤと女の子以外の三人については書類を見た為によく知っている。

しかしあちらは俺の事は全くといって知らない……警戒心があるの

は当たり前前の事だ。

「……一応は所属しているが、この姿はそれとは関係ない。あと代行者とは役職じゃなく、異端者……簡単に言えばさっきのアイツみたいな奴を狩る者の通称だ」

「さっきのアイツ……なんやかなり奇怪な感じがしたけど、一体何者なん？　なんであんな数の使い魔を連れて、こんな酷い事をするんや……」

今度は八神二等陸佐が僅かな警戒心を見せながら質問をしてくる。

何故かは分からないが、先程ヴィータ教導官の警戒心に気がついた時には感じなかった虚しさを抱いてしまった。

だがそれを表情に出さないように気をつけながら、質問に答えを返す。

「さっきの男　ネロ・カオスに関しては説明が難しい。とりあえず言えるのは、今俺達が相手にしているのはかなり最悪な部類の吸血鬼死徒だつて言う事だ」

「吸血鬼って……あの物語に存在する血を吸うあれですか？」

「まあ一般的な知識ならそんな所だな……しかし実際には吸血鬼は存在し、血を吸うのでは無く肉ごと喰らうようなネロ・カオスのような存在もいる……最も、本来はミッドチルダにはいなかったんだがな」

「敵は吸血鬼、か……駄目な質問やけど、一般的に知られてる弱点が有効って訳やないんやろう？ ニンニクとか」

「全員が苦手とか大丈夫だとかいう物は無いな。実際にニンニクが嫌いな存在もいるし、比較的多くが苦手としているのは日の光だな」

「つまりはお日様か……いや、無理やな。日が上ってくるのを待ってたら、下手したら後でくる部隊にも被害が出かねんし……」

「お前専門家なんだろう？ なんか良い案ないのかよ」

「案か……」

訓練時に習った事を思い出しながら、ネロ・カオスの攻略法を見つけるべく頭を働かせる。

俺のネロ・カオスに関する知識は決して多い訳ではない。

知っているのは、奴は666の獣の因子の集合体であるという事と、常に666の獣は異なる意識を持っており、それ故に死角が存在しないという事くらいだ。

(まあ案が無いわけではないが……問題はこの子だよな)

視線をメイヤの隣に立つ女の子へと向ける。

いくらここに結界を展開したと言っても、この子を一人にする訳にはいかない。

それはつまり、誰かをここに残して戦闘に望む必要があるという事で、可能な限り手数が欲しい自分達にとって辛い要因となる。

「あっ……」

俺が視線を向けた事でその事に気がついたのか、ヴィータ教導官が複雑な表情を見せる。

少しの間無言で時が過ぎたが、その沈黙をリインフォース？曹長が右手を挙げながら発言した。

「この子の事は、私に任せて下さいです。あの男の人……ネロ・カオスとの戦いだと大した事は出来ないかもしれませんが、この子を守る事はやり遂げて見せます！」

「リイン……」

曹長の言葉を聞いていた八神陸佐が何かを決心したかのように表情を引き締めた後にこちらへと視線を向けてきた。

その視線からは先ほどとまでは違う、何かしら強い物を感じる事ができた。

「言い方はちょっと不適切かもしれないけど、これで後方の憂いも無くなった。もうアイツの為にこれ以上の犠牲を出したくは無いです。何かしら案があるなら教えてくれへんか？」

確かに女の子の安全を確保できたのなら、こちらから打って出る事ができる。

(このままネロ・カオスを野放しにしておくこともできないし、ここはうつてでるか……)

「……分かった。今考えられる中での最善の案を教える。だけど最初に言うておくが、あくまでこれは最善の案なのであって、絶対の案じゃない。成功するかは良くて50%だ」

「それでも確率があるだけ十分や。今回私達はネロ・カオスについて何も分からへん以上……えっと……」

突然八神二等陸佐が言葉に詰まり、困ったような表情を見せる。

なぜ急にそうなったか……その理由を考えると、今までで自分が一度も名乗っていないのを思い出す。

(ここでアルクと名乗ったら、わざわざ認識妨害した意味がない……だったら……)

「一輝……俺の事はカズキと呼んでもらって構わない」

「……それじゃあカズキ、私達は今回カズキの作戦通りに動く。作戦……教えてや」

軽く笑みを見せながら話す八神二等陸佐の表情に、一瞬気持ちを持っていた。つていられる。

だがすぐに平常心を取り戻して表情が崩れるのを防いで一度周りの面々の顔を見た後に口を開く。

「それじゃあ説明を行う。これは其々の連携が大切になる作戦だ、忘れたりほしないでくれよ……」

俺の言葉に周りの皆がうなづく。

今からの戦いを決して楽観視している訳ではないが、その頷きを見た時、俺はこの戦いに勝てるという確信を得たような気がした。

第四夜（後書き）

この後、次に区切ることが出来る所まで長くなるのでここで切らせていただきます。

メインと違い、こちらはまたある程度遅くなってしまうかもしれませんが、これからも宜しくお願いします。

また、ご意見や感想を頂けるとこれからの励みとなります。

第五夜（前書き）

また文が短い……申し訳ございません

第五夜

「おかしい……やはり飢えるまでの時が早い」

最初に捕食を始めた広場に残っていた肉片を全て自らの血肉とした後に、少し前より感じていた違和感に更なる疑問が重なる。

以前の私ならこれだけの短時間に村一つ分の血肉を取り込みさえすれば少なくとも一日は飢える事もなかった。

だが今の私はその血肉を取り込んだというのにも関わらず、もう既に少しずつ飢えを覚え始めている。

今まではこのような事が無かった為に僅かながらに戸惑いを覚えてしまう。

(この感覚……まるで喰らった血肉が全て何処かへと送られているようだ……ん?)

つい先程まで感じ取る事の出来なかった強い気配に、視線をそれが感じる事が出来る方向へと向ける。

ある程度見通しが良い為に遠くまで見る事の出来る道の先……そこで何回か小さく光る物をみた直後に、体外へ放していた魂が幾つか戻ってくるのを感じる。

そして少しすると、こちらへと向かってくる三つの人影を視界に捉える事が出来た。

（先程喰らう事が出来なかったのは大小含めて六つ……隠れている者達がいるのか……）

最初は放った全ての魂を呼び戻そうと思ったが、人間如きに全力で行く必要は無い。

そう思い直した後に再度の捕食を行うべく行動を開始する。

少しでも飢える時間を短くする為に……。

「正面にネロ・カオスの気配が感じられる……このまま直進するぞ
」

「おっ！」

「はい！」

俺の言葉にそれぞれ空中と自分の後ろに位置するヴィータとメイヤが答える。

気配が感じられる広場まではおよそ400m。

本来なら一気に駆け抜けていきたいところだが、それを許さないと言うかのように走ってきた後方を除く三方から黒い獣達が襲いかかってくる。

それらに対して、俺達は相手の攻撃範囲内に入らないように気をつけながら少しずつ、だが確実に前進を続ける。

《おいカズキ、本当にアタシ達は正面から向かうだけでいいんだよな？》

《その通りだ……本当なら俺達で倒せばいいが、この数を一体ずつ倒すのは体力的に考えても厳しい。だから、ここは八神……はやての広域魔法の一撃を打ち込むのが一番だからな》

念話によるヴィータからの問いかけに、確認の意味を込めて先程決めた事を確認する。

ネロ・カオスを倒すために無い知識を振り絞って俺が考えた対策。

それは俺達三人の攻撃を陽動とした、はやての広域用魔法による殲滅だった。

複数攻撃を得意としない俺達の攻撃ではネロ・カオスに致命傷を与える事は出来ない。

その為俺達の中で倒す事が出来る可能性を持つのははやての広域魔法のみ。

だから俺はその可能性に賭ける事にしたのだ。

ちなみにはやての呼び方を言いなおしたのは、作戦を伝える際に今後はそのように呼ぶように言われた為だが……本人がいない今、言いなおす必要はなかったかもしれない。

《666なんて数の獣に素直に戦っても勝てる見込みは無いからな……上空から一気に数を減らしながら戦わないと勝ち目は無い》

《だから私達は、八神二等陸佐が広域魔法を使うまでの時間を稼ぐのが役割……しっかり務めさせていただきます！》

強い意志が感じられる言葉が念話で帰ってくるのと同時に、俺の横を光り輝く矢が通り過ぎ、黒い獣達の一匹を的確に捉える。

矢を放った張本人であるメイヤの方に視線を向けると、矢を射た直後の状態　残身の体勢から素早い動きで魔力で次の矢を形成し、弓構え・打起しと次の矢を放たんとしていた。

「正鵠必中！ フェイタルアロー！」

メイヤの手から放たれた直度にその光を増した魔力の矢は、先程以上の速度を持って数体の獣を消滅させる。

それらはちょうど俺やヴィータからは攻撃しにくい箇所で、後衛としての確なサポートをしてきている。

上空のヴィータもすっかりと空中の鳥達を叩き落としており、いつの間にか空中には黒い獣はいなくなり、地上の獣も数を減らしてきていた。

可能なら一気にカタを付けられないかと周囲を見回してみると、少し先にあるとある家の近くに火気厳禁と書かれた大型のタンクが置かれているのを見つける事ができた。

（これならいけるか？）

ナイフの一本をタンクに向かって投擲し、そのタンクに穴を開ける。幸いタンクの中は期待通りの液体が入っていたようで、粘度の高い液体が少しずつ道の方へと流れ出す。

そしてこちらへと向かってくる獣達はこちらへと向かってくる過程でその液体を足や体へと付着させてくるようになった。

（よし、いけるー！）

「一気に片付ける！　メイヤは後退、ヴィータは一旦上昇してくれ！」

「わ、分かった！」

「了解です！」

俺の言葉にメイヤは素早く、ヴィータは少し戸惑いながらも俺の指示に従う。

そして二人が十分に距離をとったのを確認すると、近くの家の壁を利用して高く跳躍を行う。

そんな俺を追って数匹の獣達が飛びかかってくるが、それより早く俺の攻撃態勢が整った。

「主よ！　この不浄を清めたまえ！」

正面から飛び込んできた獣達をまとめて投擲したナイフで貫き、そのままナイフが地面へと突き刺さる。

その内の数本は俺の狙い通りに液体　オイルが流れ出している箇所へと突き刺さり、その直後ナイフから炎が噴き出す。

次の瞬間、その炎は一気にオイルを伝って道一帯に広がっていき、足や身体にオイルを付けていた獣達の身体を焼き尽くす。

その結果、周りの建物をある程度壊してしまったが周りの獣を一通り片づける事ができた。

（だけどこれでもまだ最初のと合わせて1000いったかどうか、か……）

黒い獣達は単体では怖くはないが、その数は厄介としか言えない。

一匹でも残せば、そこからネロ・カオスは復活するのだから。

（やはりここは、はやての一撃に全てをかけるしかないか……）

「この短時間で我々をここまで傷つけるか……無意味であるが、飢えを早められては困るな……」

「っ！」

俺が着地すると殆ど同タイミングで、勢いよく燃えていた炎が一瞬の内にかき消される。

まだ余り聞きたくないと考えていた声のした方に視線を向けると、そこには余裕そうな表情を見せるネロ・カオスの姿があった。

《はやて、こちらはネロ・カオスと遭遇した。タイミングを見て合図を送るから、準備を頼む》

「了解や……万全の状態で待つとるよ」

アルクからの念話に、相手に見える訳じゃないけど頷きながら返事をする。

今私は、一人村の上空で待機している。

その理由は、私の得意とする魔法が広域に効果がある反面、呪文の詠唱に時間がかかるため。

詠唱を行っている間にネロ・カオスの黒い獣から襲われてしまったのは危ないというのと、上空からの方が狙いやすいだろうという、どちらもカズキからの提案からだった。

(アイツをここから逃がすと、ここみたいな惨劇がまた起きてしまう……それだけは、絶対に阻止せなあかん！)

この村で起きてしまった事はメイヤから説明してもらった……ほんの数十分で一つの村の住民や陸士部隊が命を落としてしまったなんて、正直な気持ち信じたくない。

ただ上空から見るこの村には、その出来事が事実であることを示すかのような痕跡や一般局員に配られるストレージデバイスらしきものが落ちているのが分かる。

ネロ・カオスに命を奪われた人達には、それぞれ大切に思っている人や逆に大切に思ってくれていた人がいるだろう……その人達の悲しみを考えると、心がとても苦しくなってくる。

アルクが言うには、一番ネロ・カオスを倒せる可能性があるのは私だという事らしい……それなら、この攻撃は絶対に失敗する訳にはいかない。

「みんな、頼むで……」

今地上で頑張っている三人と、女の子を守っているラインの顔を思い出した後、私は夜天の書のページを開いて呪文の詠唱を始めた。

第五夜（後書き）

誰かもっと自分にはやてを魅力的に書くコツを教えてください……

もっと魅力的に書いてあげたい……

第六夜（前書き）

遅れてしまつてすみません。

色々と微妙なところがあるかもしれませんが……どつぞど。

第六夜

「捕食から時が経ち、少々飢えてきた……この飢え、お前達を喰らう事で満たさせて頂こう」

ネロ・カオスがコートを翻すと同時に、そのコートの内側から何体もの黒き獣達が姿を表す。

だがその姿は今までのような犬や鳥ではなく、熊や虎に牛といった大型の獣が多くなっていた。

「ちっ！」

すぐに距離を取って戦闘を再開するが、身体が大きい分耐久力があるようで一回の攻撃で倒せない事が多くなってくる。

「くそっ、コイツら……」

「くっ……」

それは上空にいるヴィータや後方のメイヤも同様のようで、先程よりやりにくそうな表情を見せていた。

特にメイヤは今までに比べて保つ事が出来ていた間合いを守れず、

距離を詰められる回数が多くなってきているようだった。

（身体が大きい分、動きが遅くはなっているがその分耐久力がある……
……タイプのメイヤにはキツいか……）

「我々の前で他人を気にするとはな……」

「っ!？」

先程より近くで聞こえてきた声に視線を戻すと、ネロ・カオスが一回の踏み込みで肉薄できる距離まで接近して来ていた。

そして再度コートを翻したかと思うと、頭部に鋭い角を備えた黒き犀が飛び出し、俺の腹部目掛けてその角を突き立てようとした。

（回避が間に合わなくとも直撃だけはしないっ!）

反応が遅れた為に回避する事を諦めて両手のナイフを交差させ、角の一撃を受け止める。

しかしながら犀の突進力を完全に受け止める事は不可能で、次の瞬間体が浮いたかと思うと後方にあった家の外壁へと思いつきり背中を打ちつけていた。

「がばっ!？」

勢いよく壁にぶつけられた為に、肺の中から一気に空気が押し出されて行くのを感じる。

そして全身を縛るように走った痛みで体の自由を失った俺はそのまま地面へと倒れ込んだ。

「っ………今のは！」

今まで時折耳に捉えていた音とは響く重さの違いに気がついた私は、視線をその音が聞こえてきた方へと向ける。

「カ、カズキさん！？」

視線を向けた先、そこでは今まで黒い獣をナイフの投擲で壁や通りに叩きつけていたカズキさんが大きく罅が入った壁から地面へと倒れ込み、そのカズキさんへとネロ・カオスがゆっくりと歩み寄っていた。

カズキさんは気を失ってしまっているのか、なかなか起き上がる様子を見せない。

先程助けて下さった方を見捨てる訳にはいきません！

頭に浮かんだ言葉に従って弓を構えると、二頭の虎が妨害するかのよう飛びかかってくる。

「邪魔をしないでください！」

右手に構成した魔力矢により一層の魔力を注ぎ込む。

それによって鏃の部分が普段構成する細く鋭いものから太く広がった形へと変わっていく。

更に魔力を鏃へと集中させた後、その矢を二頭の虎の間から見えるネロ・カオスへと気持ちを集中する。

「参ります……二の弓【残心解放】」

大量に魔力を込めた矢が手から離れると、一瞬私の目の前で白銀に光る矢が静止する。

その間にネロ・カオスはカズキさんを捕食する為か、コートの中から黒い鰐のように見える頭部を出現させており、その口が大きく開

けられていた。

「解！」

静止した矢が高速で二頭の虎の間を通り抜け、その二頭の虎の身体を切断する。

そしてそのまま矢は鱈の頭部へと直撃し、それを吹き飛ばす。

それにはネロ・カオスも少なからず驚いたのか、一瞬表情を歪めた後に私へと視線を向けてきた。

「……ほう、魔力で矢に空気の刃を纏わせるか……しかしながら、今の攻撃でかなり魔力を消費したのではないか？」

「くっ……」

ネロ・カオスの指摘通り、今の攻撃はいつもより多くの魔力を消費する代わりに鏃へ空力による刃を纏わせた事で可能となったもの。

そして気がつかれないように気を張ってはいしたが、その二の矢を使用したことでかなりの魔力を消費してしまっている。

だから今ネロ・カオスと対峙して戦うのは不利としか言いようがない。

「今の攻撃で更に飢えが強まった……お前の血肉で腹を満たさせてもらうぞ」

「きゃっ!?!」

ネロ・カオスがコートを翻すと、次の瞬間には強い衝撃を受けて壁に叩きつけられると同時に手足の自由が効かなくなる。

その原因を知るために生暖かさを感じる両手足へと視線を向けると、そこには黒く粘着性のある何かが手足を拘束していた。

「我が身を形成する混沌魂は自由に姿を変える……下手な抵抗はさせん……」

「くっ……」

「メイヤ、今助け……っちい!」

上空のヴィータさんが私の事を助けようと行動してくれましたが、それを妨害するように他の黒い獣たちがヴィータさんの進行方向を妨害する。

その間にネロ・カオスは私の方へとゆっくりと歩みを進め、先程私が吹き飛ばしたのと同じ鱧の頭部をコートの中から出現させた。

その口からは私を喰らう事で得られる満腹感を想像してか、涎のような液体を口元から溢れさせていた。

それを見た瞬間、私の心の中に諦めに近い感情が込み上げてきた。

(私……食べられてしまうの……あまり人の役にも立てずに……)

「安心しろ、痛みは無い……すぐに我々の身体に同化するからな……」

ゆっくりと近づいてくる頭部からの生温かい吐息が、恐怖心を煽って体を硬直させる。

そしてあと少しで鰐の口が私の身体を捉えようとした瞬間、耳に金屬が硬い物を削るような音が聞こえてきた。

「む……」

「これは……」

気がつくまで私達の周囲には何かしらの模様が刃物で刻み込まれていた。

しかもその模様、少し前に私たちが目にしていたのとかかなり似たものだった。

「この模様は……もしかして……」

この模様を周りに描いた人物に気がついてその人がいる筈の場所へ視線を向ける。

すると丁度その人が地面を滑るように模様を描いていた六本のナイフをしゃがんで手に持ち直している様子が見れた。

「カズキさん！」

「何とか間に合ったな……さっきはありがとな、メイヤ。すぐに助けてやるから待ってるよ」

左右の手に其々三本のナイフを持ち、右手のナイフをネロ・カオスへと向けたカズキさんの表情はとても頼もしく見えた。

「拘束用の結界か……無駄な小細工を……」

「俺もどちらかと言えばこういう事は得意な方じゃないが……悲しい事にお前のような相手に真っ向勝負で勝てる程の実力を持ってい

ないからな。この結界の中ならお前自身はともかく、混沌とやらは自由には動けまい」

「確かに……だがそれでどれだけの意味があるかな……」

ネロ・カオスの言葉に僅かに笑みを浮かべて余裕があるように見える。

だが実際は先程壁に叩きつけられた衝撃でかなりのダメージを受けており、打ち身だけでなく骨にもダメージがあるかのように感じる。

（こつという時はバリアジャケットの能力をもう少し身体保護に回した方が良かったと考えるな……とりあえずまずはメイヤの救出だ）

「行くぞっ!」

姿勢を一瞬低くした後、両足で強く地面をけり出す。

その勢いを利用して一気にネロ・カオスとの距離を詰める。

「ふん!」

その接近に合わせて、再び黒い犀が姿を現しその角を突き刺そうと向けてくる。

犀はその状態で突進を始める。
しかし次の瞬間、俺は自身の進行方向を真横へと変える。

（かかった！）

本当に俺が目指すのはネロ・カオスの懐ではなく近くの家の壁、その壁を再度足場として強く蹴る事で今度は垂直に飛び上がる。

そしてネロ・カオスの真上を陣取ると、そこからナイフ四本を上下4ヶ所を囲うように投げて地面へと突き刺す。

その瞬間、ナイフを起点として十字の光がナイフを結び、ネロ・カオスの身体を拘束した。

「むっ……」

「多重拘束だ。こっちの魔力の大半を込めさせてもらった、そう簡単には解除できないぞ」

メイヤの側に着地すると同時に、手足を拘束している混沌を残り二本のナイフで切り裂く。

結界の中で弱っていたのか、混沌は思ったより容易に切断でき、すぐにメイヤを解放する事が出来た。

「ありがとうございます、カズキさん。一回も助けていただいて……」

「お礼は後だ、とりあえず今は……」

手に残していたナイフをネロ・カオスの足元へと投げて更に拘束結界を強固な物とする。

更にヴィータに一瞬視線を向けると、こちらの言いたい事を感じたのかすぐに離脱を開始する。

それを見てメイヤも何をするべきか理解出来たようでヴィータに続いて離脱を始めた。

(これで後は合図を！)

そして最後の仕上げにと懐からある物を取り出すとそれを上空へと思いつきり投擲し、その後俺自身も離脱を始めた。

「来たっ！」

村の一角を明るい光が照らし出す。

それはカズキが投げた発光弾で、そこにネロ・カオスを拘束したという合図。

（ちょうどこっちの詠唱も終わる……これなら行ける！）

この合図を待っている間に、私は長い詠唱を行って合図に合わせて魔法を発動出来るようにしていた。

実際それを表すように、私の頭上にはベルカ式魔法陣と共に多くの魔力によって構成された巨大な漆黒の魔力スフィアが存在している。

（みんながお膳立てしてくれたこの状況……確実に決めたる！）

「遠き地にて、闇に沈め！ デアポリック……エミツション！」

詠唱の完了と共にベルカ式魔法陣が白い光を発し、それと同時に魔力スフィアが圧縮されるように消滅する。

そして次の瞬間、消滅した魔力スフィアが発光弾が投げられた箇所に再度出現して一気に周囲を包み込む。

スフィアに包み込まれた物の内、建物は損傷を負わない。

(範囲は抑えたから、ライン達がいる場所には問題はない……あと
は倒せたのを確認するだけやな)

《聞こえるか、ヴィータ。今みんなどこにおるん……》

念話でヴィータに今の居場所を聞きながら、合流をなるべく移動を
開始した。

「これがはやての広域攻撃魔法……かなりの迫力だな……」

「凄い光景ですね……」

「その分威力も保証付きだ、これでネロ・カオスの野郎も……」

村の一角を飲み込んだはやての魔法に、メイヤと共につい感嘆の声
を発してしまう。

またヴィータもアイゼンを持っていない方の手で軽く握りこぶしを作りながらスフィアが小さくなっていくのを見つめていた。

「みんなーっ！ 大丈夫ー？」

「はやてーっ！ アタシ達は大丈夫だよーっ！」

少ししてはやてが黒い翼を羽ばたかせながらこちらへと飛んでくる。そして俺の正面へと着地すると、一度大きく深呼吸をした後に俺の表情を伺うように視線を合わせてきた。

「カズキ、私の攻撃でネロ・カオスは倒せたんやろうか？」

俺に問いかけるはやての表情は期待と不安が入り混じって見える。

またメイヤやヴィータも会話には入ってこないが俺の答えが気になるように意識を向けているのを感じる。

本当ならこの場で三人を安心させられる答えを出せるのが一番良いのだが、ここではその言葉は口に出来ない。

何故なら相手はあの死徒ネロ・カオスなのだから。

「……正直まだ分からない。だから……この目で確かめに行く」

短く問いに答えた後、俺は再度先程まで戦闘を行っていた地点を指す。

先程のはやて同様、期待と不安を胸に抱きながら。

「はやてちゃん達、大丈夫でしょうか……」

結界が施された家の中。

そこではやて達の連絡を待つリインフォース？は外で戦闘を行っている筈の四人を心配する気持ちからか、部屋の中を行ったり来たりするのを繰り返していた。

だがそんな自分をリカが少し心配そうに見つめている事に気が付くと、一度咳払いをした後に安心させる為か笑みを見せる。

「もう大丈夫ですよ、リカちゃん。悪い人は絶対にはやてちゃん達が倒してくれるですから」

「……………本当？」

「本当ですよ。だから、もう少ししたら安全な場所にいきますから……………もう少しリインお姉ちゃんと待っています」

「うん！」

リインの言葉を受けてか、リカの表情にも笑みが見られる。

そして二人はそのままはやて達が帰ってくる事を待つのを続ける。

だがその時二人は知らなかった。

二人がいる廃墟へと近づくと、一頭の鹿がいる事に……………。

第六夜（後書き）

指摘や感想等がございましたらメッセージや感想を頂けると嬉しいです。

第七夜（前書き）

実に一カ月……遅くて申し訳ございません。

今回は文の書き方を変えてみました。

今回と今までのどちらが読みやすいか、意見を頂けると幸いです。

第七夜

「だいたいこの辺りだな……」

ネロ・カオスを魔法陣で拘束した地点へと到着した後に、ネロ・カオスの気配が残っていないか確認する為に神経を尖らせる。しかしながらはやての広域魔法は強力な反面、使用後も長い間魔力が残るのか上手い具合に周囲の気配を感じる事が出来ない。

(気配が感じられない理由が単純に倒すことが出来たからなら良いが……)

「カズキ、いきなり移動始めるなよ！ 一瞬ビビっちまったじゃねえか！」

少しすると飛行魔法を使って追いついてきたヴィータが近くへと降り立つ。それに少し遅れてはやて、更に俺同様に飛行魔法が使えないメイヤが追いついてくる。メイヤは飛んでいる二人に遅れないよう全力で走ってきたのか、少しばかり息切れをしていた。

「カズキって、飛行魔法は使えなくても地上の移動速度が速いんやね……ちょっと驚いたわ」

「本当に……凄いですね……私なんて皆さんについて行くのが精いっぱい……」

「俺の仕事の都合上、移動速度が早いというのは重要な要素だからな。俺だとまだ遅い方だ」

「これで遅いつて……飛行魔法使っていて追いつけない身としては、何か恐ろしい仕事場やね……」

俺の答えを聞いて、はやてが苦笑いを見せる。確かに周りが周りなだけに気にしていなかったが、一般常識的に考えて飛行している魔導師より早いというのは少々奇怪ではあるかもしれない。

(慣れるというのも考えものか……っ!?)

はやての言葉に考えを改める必要があるかと思っていると、会話をしていた為に程良く力が抜けていたのか、一瞬だけだが不可解な気配を感じる事ができた。だがそれがネロ・カオスのものかと聞かれると絶対の自信が持てない。

(とりあえず結界の中で待っている二人にはもう少しの間待っていてもらうか……)

「はやて、リインフォース？曹長に連絡を取ってくれないか？念の為、もう少しの間待っているように伝えてほしい」

「了解や……あとあの子の事はリインって呼んであげてや。その方があの子も喜ぶと思うんよ……あ、リイン。そっちの状態はどうや

……」

はやてがモニターを使って通信をしているのを横目で見ながら、再度気持ちを集中させて気配を探る。今度はすぐに気配を察する事が出来たが、それは決して俺が落ち着きを維持したままで集中できなかったのではなく、明らかにあちらが殺気をむき出した為。しかもその気配を感じた場所は、俺達にとっても都合が悪い場所だった。

(この位置は……やばい!?)

「キヤアアアアアツ!!」

俺が大急ぎで警告をしようとした瞬間、それが遅いというかのようにはやてがリインフォース?と繋いでいた通信から悲鳴が聞こえてきた。そしてその悲鳴が聞こえてくると殆ど同タイミングで、俺の描いた魔法陣が外的要素によって破壊・無効化された事が感じられた。

「お、おいリイン! 一体何があったんだよ!」

「だ、駄目です……通信が切られてしまっています……」

「カズキ、もしかしてリイン達の元に……」

「とにかく今は二人の元に戻るぞ! 今すぐにだ!」

すぐに使えるようにとナイフを手に持ちながら、結界を張っておいた家への道を全速力で駆け抜ける。これ以上ネロ・カオスによる被害を増やさないようにする為に。

「リンお姉ちゃん……」

「大丈夫ですよ……リカちゃんは、絶対に私が護ってあげますから……」

体を震わせて怯えているリカを自らの身で庇うように立ち、十歳の少女程の大きさとなったリンフォース？は少し離れた所から自分達を見つめる存在の動きを見逃さないようにする。

目の前に立つのは先程カズキ　アルクが張った結界を外側から壁ごと打ち砕き、侵入してきた存在……その黒い身を僅かに差し込む月光に照らされた鹿は、ただじっと自らに視線を向ける二人を観察するかのようになっていた。

「これ以上近づかないでください……これ以上の接近は、敵対行為とみなして攻撃するですよ」

黒き鹿がいつ攻撃の姿勢を取って来てもいいように、リインは警告を口にすると同時に自らの前方に氷で構成されたダガーを展開して威嚇を行う。だがその全てのダガーの切っ先を全て向けられた状態になっても鹿は動揺等をする様子は見せなかった。

そして今まで動かしていなかった首を左右にふったかと思うと、今まで閉じていた口を開いた。

「なるほど……人数が足りないと思っていたが、戦えぬ者達は結果の中で身を震えさせていたのか……」

「しゃ……しゃべったです……黒い獣が……」

「獣の魂が全て理性を持たないという訳ではないからな……さて、お前達の血肉を我らの物とさせてもらおうか」

「ひっ!？」

鹿の言葉に少し前に自分の目の前で起きた出来事^{惨劇}を思い出したのか、リカが短い悲鳴を上げる。それに気がついたリインは、再度リカの身体が少しでも自分の後ろに隠れるように立ち位置を変える。そして手を一度横に広げた後、その両手を近づいてくる鹿へと突き出して展開していた氷のダガーを射出した。

だが

「笑止」

鹿は一言口から発すると、頭部から立派に伸びる二本の角を左右に振り回してそのダガーを叩き落とす。

「くっ……」

自らの魔法が容易くあしらわれたのを見て、リインが悔しそうな表情を見せる。だがその次には再び表情を引き締め、一度後ろにいるリカを一目した後に黒き鹿の方へと足を踏み出す。

「まだ諦めません……例えば私が貴方に食べられたらとしても、この子だけは絶対に守ってみせるです！」

再度リインが両手を広げると、今度は先程より数の増えたダガーが出現し、即座に黒き鹿に向けて放たれる。放たれたダガーは先の攻撃のように全てが同じ速度である訳ではなく、また広範囲から向かうようにされていて容易に避けきる事が出来ないようになっていた。

だが黒き鹿は先程の叩き落とす動作に加え、しなやかな動きでステップを踏むようにダガーの着弾地点から離れた。

「その心いきは良し……だが我らには力が及ばぬ」

動きを止めた黒き鹿の足元に、その身体の色と同じ漆黒の沼のようなものが出現する。その沼は一気に面積を広げていき、すぐにラインの足元へと到達すると次の瞬間には触手のようなものがラインの両手足を拘束した。

「し、しまっ……」

「しかしながら我らはそれを評価をしない訳ではない……まずは汝を喰らい、完全に取り込んだ後に後ろの少女を喰らうでしょう」

鹿の発言に合わせるように、今度は沼の中から鮫のような生き物が姿を表す。その鮫のような生き物は鹿の周りを一周した後、ゆっくりとラインに接近していく。

一方で近づいてくる鮫に視線を向けていたラインは、悔しさからかその両目に涙を浮かべていた。

「ごめんなさいです……ラインは……ラインは……」

「喰らえ」

そしてリインの足元近くまで接近した鮫のような生き物は、その大きな口角を開き、そこから生える鋭い牙で目の前の獲物^{リイン}を引き裂こうとした瞬間

三本のナイフが目標を捉える前の上顎を捉え、鮫のような生き物が苦しみの表情を見せ、身体をしならせる。

「今だヴィータ！」

「てりやあああああああつ！！！」

更にいつの間にかリカの元へと到着していたアルクに続く形で、ナイフの投擲を受けた事で出来た隙をつくように低空飛行でリインと鮫の間へとヴィータが割り込んでくる。その彼女の手には相棒と言えるグラーフアイゼンがラケーテンフォームでしっかりと握られており、後はそれを振り切るだけの体勢となっていた。

「吹き飛べ！ ラケーテン、ハンマアアアツ！」

カートリッジの排出の後に真横に振られたハンマーの一撃は正確に鮫の側頭部を捉え、鮫はその一撃によって沼のようなものから全身を見せたと思った瞬間、砂が撒き散らかされたかのようにその身を消滅させた。

「リイン！」

「リカちゃん！」

それに少し遅れる形ではやてとメイヤが到着し、それぞれ拘束されていたリインと少しずつ迫っていた沼のようなものに怯えていたリカの元へと駆け寄る。

「リイン、今助けるから待っててな」

リインの元に辿り着いたはやては、自らの手に魔力を集中させた後にリインの手足に絡む触手に触る。触手ははやての魔力の込められた手が触れた瞬間に氷結し、それによりすぐにリインは解放された。

「あ、ありがとうございます。はやてちゃん……」

「リイン、よう頑張ったな……ここからは一緒に行くよ？」

「はいです！」

「「ユニゾン・イン！」」

言葉を交わした二人が光に包まれたかと思うとその場からリインの姿が消え、その代わりにはやての髪の色が栗のような茶色からリインと同じ白銀に近い色へと変わる。そして光が完全に消えると、はやては強い意志のこもった視線を黒き鹿へと向ける。

「ほう、精神を同調させる事で自分達の持つ力を増長させるか……
面白い」

「結構賢いようだな、お前……だがどうしてだ？ 他の獣達ならともかく、明らかに知性があるお前なら俺の展開した結界を破壊した瞬間に俺達が二人の元へ駆けつける事が分かっていた筈だ……それなのに何故すぐに捕食しようとしなかった？」

「……フフツ」

リカをメイヤに任せてヴィータの傍まで歩いてきたアルクの言葉に、黒き鹿は暫しの沈黙の後に口元に僅かな笑みを浮かべる。その笑みは、まるで自分の企みが成功したのを見て喜ぶような、どこか相手を見下すような視線が含まれていた。

(何だあの笑みは……何かしら策があつての事だといふのか?)

使い魔の不適な笑みを見たせい、今まで代行者として研ぎ澄ましてきた警戒心が警笛を鳴らしてくる。だがその警戒すべき物が分からず、思考が鈍る。

(冷静になつて考えろ……どうしてアイツがここまで余裕でいられるのかを……俺達の誰かをしとめる事が出来る絶対の自信があるのか?)

何か見逃している事が無いかと、正面の使い魔からは意識を逸らさないようにしながら周囲に視線を配る。そして自分の後ろの方を確認しやすくしようとした瞬間に気がついた。今俺達が脚で踏んでいるのはネロ・カオスの身体を構成していた混沌そのものである事と、その混沌が少しずつメイヤとはやての足元へと集まりつつあることに。

「はやて、メイヤ！ 急いでここから離脱しろ！ 狙われているぞ！」

「「えっ!?!」」

「遅い……」

その事に気が付いていない二人に注意を促すが、既にあちら側の準備も終わっていたようで二人が行動を起こそうとした瞬間に足元で集束していた混沌が一気に何かしらの姿を形成しようとする。その混沌はそれぞれ二人の死角となる場所で形を形成しており、どち

らも確実に回避行動が遅れると直感的に分かる事ができた。

「間に合ってくれ！」

振り返ると同時に、左手に持つ魔力を込めたナイフをメイヤの側で自らの姿を形成しようとする混沌へと投擲する。投擲したナイフには魔の行動を抑制する術式を込めており、ナイフが刺さった混沌は一気にその動きを鈍くした為にメイヤはリカを連れてその場を離れる事に成功する。

そして俺は

「すまないはやて！」

「きゃっ!?!」

少し申し訳ないと思いつつも、はやてをその場から突き飛ばすことで混沌から少しでも距離が離れるようにし、代わりに俺自身が混沌の正面へと立って先程投擲した物と同じ術式を込めた残り三本のナイフを混沌へと突き刺そうとする。本当ならばはやての方もナイフの投擲で助ける事が出来れば良かったが、立ち位置の都合や両方に投擲を行っていた場合は明らかにタイミングが遅くなると思つての判断だった。

「はあっ!」

そして右手のナイフを目の前の混沌へと突き刺すと、こちらもメイヤ側の混沌と同じように動きが遅くなり、とりあえずの相手の手を潰すことに成功した。

と、その時は思っていた。

「まだまだ考えが甘いな、埋葬者よ……」

「なっ!?!」

今まで会話していた使い魔とは異なる、どこか重く響いてくる声
が耳に届いたと思った瞬間、引き抜こうとしたナイフが混沌によつ
て抑え込まれ、そのまま俺の右手まで包み込んできた。その拘束力
は強く、例えナイフを手放してもその右手を引き抜く事が出来な
かった。

「こ、これは……」

「汝ならこの混沌に近づく危険性に気がつくと思っていたのだがな……興が冷めた、お前は最後に喰らうとしよう……」

再度混沌が人の姿を形作ると、俺の目の前には先程倒した筈のネロ・カオスが姿を現す。生き返るとは聞いていたがこれほどに早いものだと思っておらず、驚きが表情に出してしまうのが感じられた。そして先程の使い魔と何処かいた笑みを見せたネロ・カオスがマントを翻すと、そこから現れた一羽の鳥が赤い目を光らせる。

「ちっ……」

覚悟を決めた俺は何とかして引き抜こうとしていた右手の力を抜き、左手で空中にとあるものを描く。その直後一度大きく羽ばたいた後に突撃してきた鳥がまるで弾丸のように俺の腹部を貫いた。

第八夜（前書き）

月一投稿……ペース上げたいですね

第八夜

(一体何が……って、え?)

最初背中を押された時は一瞬何が起きていたのか分からなかった。ただカズキが注意を促した瞬間に背後で何かが蠢いたような気がしたと思つたら、もうその次には突き飛ばされて地面へと倒れ込んでいた。

そしてその直後に僅かに頬に生温かいもの　血が頬に飛び散ってきたと頭が理解したと同時に視界に捉えたのは、いつの間にか現れていたネロ・カオスの正面に立つカズキ。

その彼が着るバリアジャケットから血が滴っていると気がついた時には、彼の身体はゆっくりと地面へと倒れ込み始めていた。

「カズキ(さん)!?」

「急所は外してしまつたか……しかしながらその状態ではもう我々の敵ではない、お前達を喰らつた後に取り込もう」

咄嗟に倒れ込むカズキを受け止めると、背中にまわした手に先程頬に感じた生温かさを感じる。十中八九、今私を見降ろしているネロ・カオスから私を庇つた為にカズキはこんな重傷を負つてしまつた。そう考えるととても申し訳なく、また自分の事を腑甲斐ふがい無く思つてしまう。

「テメエ、やりやがったな！」

『Schwalbfliegen!』

「喰らうって言うなら、コイツでも喰らいやがれ！」

ヴィータも少なからず怒りを覚えたのか、至近距離ながらも目の前に鉄球を出現させた後にネロ・カオス目掛けて撃ち出す。それは簡単にネロ・カオスに無効化されるけど、その間に私はカズキと共にネロ・カオスから距離を取る事に成功した。

《ヴィータ、メイヤ、カズキとリカちゃんを安全な場所まで連れてく。すまんけど、二人で頑張ってくれへんか?》

《了解!》

《了解しました……この役目、果たさせていただきます!》

『リカちゃんは私が連れていきます。だからはやてちゃんはカズキさんを』

頼もしい返事が返ってきたのを確認した後に、精神疲労からか気を失っていたリカちゃんとカズキを連れてその場を離れる。幸いユニゾン中である為カリカちゃんとカズキの二人を離れた状態でも飛行は可能で、すぐに戦いの場所となった家から少し離れた箇所に行く事が出来た。

「リカちゃん、何度も怖い目に合わせてごめんなさいです……」

私とのユニゾンを解除したリインがリカちゃんを比較的安全と思える場所に横たえるのを見た後にカズキをベッドに寝かせる。気をつけるようにしていたけど、背中がベッドに触れた瞬間、カズキの身体が痛みからか僅かに震える。

「くっ……悪い……足を引つ張る形に……なっちまったな」

意識を取り戻したのか、カズキから話しかけられる。けどどやはり傷が深いのか、その言葉は途切れ途切れだった。

「そんな事無いって……むしろ謝らんといかんのは私の方や。私がしっかりとしとらんかったばかりに……」

「私もごめんなさいです……リインが捕まりさえしなければ、はやてちゃんだって危険に晒される事は……」

話を聞いていたのか、隣に来ていたリインもカズキに対して頭を下げる。その両目には負い目を感じているのか涙が見えた。

「お前達は初めての死徒戦だったのに……十分……戦えてる、元々かなりの格上だ……気に病む必要は……ねえよ」

起き上がろうとしたのか、カズキが僅かに身体を動かす。だけどその直後にまたさっきと同じように表情を歪め、動くのを止める。やはり私達を助ける為に負ってしまった怪我は相当カズキを苦しめてしまっている。

「無理に動こうとしたら駄目です！ まずは怪我を治療しないと……」

「た、確かにな……それじゃあちよつと……コイツに流す魔力を増やすか……」

カズキが今まで握り締めていた左手をゆっくりと開く。そこには淡い光を発している、何かしらの文字みたいな不思議な物があった。

「カズキ、これは……」

「簡単に言えば治療促進用の魔術文字だ……こいつに魔力を流せば……ぐっ……」

少しずつ話す事自体が困難になってきているのか、カズキが苦しそうな声を漏らす。それと同時に魔術文字と言われたその光が弱々しくなった。

「カ、カズキ!?!」

「カズキさん!？」

《だ、大丈夫だって言ってるだろう……埋葬者として、これくらいの負傷は慣れてる方だ……ちょっと場所が場所なだけに話すのが辛くなってきただけだ……初対面の女性に二人揃って泣かれるなんて、そっちの方が慣れてないな》

念話でのカズキの言葉で、始めて自分がリインと同じように泣いていた事に気がつく。そしてなんとなくリインの方へと視線を向けると同じようにこちらへと視線を向けていたリインと目が合った。その瞬間、何となく気不味いと思ってしまうすぐに視線を逸らした。

「そ、それで、その魔術文字……やったよね、それに魔力さえ流せば治療魔法を使うのと同じ効果が得られると思ってええんか？」

《ああ……もつとも治療魔法と違って、これで得られるのは治療効果で無くて自己治癒力の向上だから、断続的に魔力を流し込んでいないと効果がないけどな》

「そ、そんな魔法が存在するんですね……」

《ん……まあな。だが実のところ、今回の怪我は俺の魔力だとちょっと時間がかかっちゃうかもしれないが……意識を維持する事にある程度集中する必要があるせいで、文字に対して一度に回せる魔力が少ない……》

「そ、そうなんか……」

「魔力を流す……」

思うところがあつたのか、リインが先程のカズキの説明であつた一節を呟く。そして少しした後一度頷き、カズキに話しかけた。

「……カズキさん。その文字に流す魔力というのは、その自己治癒力を高める対象の人じゃないと駄目なんですか？」

《いや、そういう訳じゃない……これは注がれた魔法を体内に循環させるものだが、別にそれが対象者である必要はない》

カズキの返事を聞いたリインの表情が明るくなるのを見て、リインが何を考えているかに気がつく。そしてリインがやるうとしている事は、私にもできることであるというのも想像がついた。だから私はリインの言うのであるうことに付けたす事を決めた。

「それではカズキさん。その文字に魔力を流す役目、私に任せてほしいです……駄目ですか？」

「同時に複数人でも大丈夫なら私も協力させてや。リインも十分な魔力を持つてるけど、私も一緒に魔力を注げばきつともっと早く傷も治るはずやし」

《そ、それは可能だが……良いのか？ 確かに俺にとってはかなり助かる事だが、常に魔力を放出し続けるっていうのはそれなりに負

担がかるんだぞ?」

「その点は気にしなくても大丈夫や。私もリンも魔力量には自信あるから……だからお願いや！ 可能なら私達にやらせて！」

「お願いします！」

さつきカズキは私達に非は無いと言ってくれた。それでも命の危険を自らの身を持って助けてくれた人^{カズキ}に何かしらをしてあげたいのだ。

「……分かった、それじゃあ頼む……ただ俺も二人の魔力を同時に循環させた事は無いから、とりあえず確実性を考えてある方法で頼みたい……」

「うん、分かったよ」

「了解です」

「それじゃあ説明するぞ。まずは……」

念話を使ってカズキが魔術文字に魔力を流す手順を説明していく。そして説明が一通り終わった後にまずは私が魔力を流す為にカズキの左手をしっかりと握りしめた。

「うおおおおっ！」

力強くグラーファイゼンを振り被ったヴィータが低空飛行で己が倒すべき相手へと一直線に向かっていく。ヴィータがアイゼンの一撃を与えんとする相手　ネロ・カオスは勢いよく迫るヴィータにも表情を曇らせる事無く反応し、その場から動く事無く足元から黒い鳥を何羽も飛び立たせる。

足元から飛び立った鳥達はヴィータの真上を取るかのように上昇し、ある程度の高さには到達すると真上から強襲するつもりなのか、狙いをつけるように一瞬その場にとどまる。
その瞬間

「させません！　正射……必中！」

その鳥達に対して、予め狙いをつけていたかのようにメイヤの放った矢が次々と命中していく。流石に一発ずつ放つ為に全ては落とす事が出来なかったが、それでも大半の鳥を落とす事が出来た為にヴィータは殆ど攻撃を受ける事無くネロ・カオスへと接近する事に成功した。

「じんのおおおっ！」

一気に距離を詰めたヴィータは自らの攻撃範囲にネロ・カオスを捉えると振り被っていたアイゼンを胴を薙払うように振り切る。その一撃は接近されても一切動く事のないネロ・カオスの腹部をしつかりと捉え、その上半身を衝撃によって吹き飛ばす。だがそれでもヴィータやメイヤは表情を緩めることなく、ヴィータは上下二つに分かれてしまったネロ・カオスから距離を取るようにメイヤの元へと戻る。

「今度こそやったか？」

「……いえ、どうやら駄目なようです」

ヴィータの探るような言葉にメイヤが答えるのを合図とするかのように、上下二つに分かれていたネロ・カオスの身体が先程のように黒い塊へと代わる。そしてその塊が再び一つにまとまると、それは先程まで余裕を持って立っていたネロ・カオスの姿を再び造り出した。

「ちっ……また駄目だったか……おいメイヤ、身体の方は大丈夫か？」

「はい……ですがそろそろ魔力的には少々辛いかもしれません……」

「どうした？ もうお前達の体力は限界へと近づいてきているのか？ 我々はまだまだ十分に戦う事が出来るぞ？」

疲労から少しずつ息がきれてきているヴィータとメイヤを前にして、ネロ・カオスは先程の攻防でもダメージが無い事を示すかのようにならぬコートに裾を軽く翻す。そのコートの中からは幾多もの赤い眼が二人を見つめており、時折獲物を欲するかのようなうめき声が聞こえてきていた。

はやてとリインが離脱した後、ヴィータとメイヤは二人でネロ・カオスとの戦闘を続けていた。だが元々アルクを含めた三人で戦ってやっと互角と言えていたかどうかだった事もあり、二人は攻めに転じても有効打を与える事が出来ず、逆に強力な攻撃を防ぐ為に防御魔法を多用した。

そして防御にも魔力を使用する事は変わりない為、二人は体力・魔力共に厳しいところまで追いつめられていた。

「しかしながら自らの無力を恥じる必要は無い……お前達は我ら混沌を相手によく頑張った方だ。安心して、我々の糧となれ」

「そんな事、絶対させへんよ！」

「ん？」

ネロ・カオスの言葉を否定する一言が響くと同時に、ヴィータ達

の足元に魔法陣が描かれる。その魔法陣は白と青の二色に輝き、少しずつその光を強めていく。

「なんでしょうか、この魔法陣……なんだかとても温かい感じが……」

「この魔力……もしかして……」

「ちよいとお邪魔するぜ、二人とも」

魔法陣から感じる不思議な魔力にヴィータ達が少なからず動揺している。魔法陣がその大きさを僅かながら大きくしたかと思つた直後に二人の前に一つの人影が降り立つ。そして軽く手首をスナツプさせた後に大きく息をはき、強い視線をネロ・カオスへと向けた。

「ほう、もうそこまで動けるようになったか……人はずれた回復力を見せてくれるな」

「殺してもすぐに蘇ってくるお前には言われたくないさ……さつきは遅れを取ったが、今度はそうはいかないぜ？」

「今度は私も一緒に行くで……これ以上、アンタの好きにはさせへんよ！」

人影に続いてユニゾン状態のはやてが魔法陣の上へと降り立ちながら先の人影と同じように強い視線を向けるそしてネロ・カオスの

言葉に、僅かに皮肉を交えながら答えた人物　アルクは一度先程
ネロ・カオスの攻撃が貫通した胸部へと手を当てた後、その手を腰
のホルスターへ動かした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7272s/>

魔法少女リリカルなのは ～夜天を射る弓～

2011年10月12日08時59分発行